

蘇州日本人学校における中国文化に関わる教育活動

前蘇州日本人学校 教諭

北海道苫小牧市立沼ノ端小学校 教諭 浜口 岳彦

キーワード：中国文化、文化体験

1. はじめに

(1) 日本人社会と児童生徒

① 中国のイメージ

ご存じの通り、日本における中国のイメージは、あまりよいとは言えない。しかし、実際に中国で暮らしてみると、当たり前なことだが、深く多様な文化や歴史に圧倒される。また、中国人の方は、基本的に日本に対して友好的である。

蘇州日本人学校に赴任し、中国のことが嫌いな子、中国のことを悪く言う子が多いと思った。様々な事情を抱え、中国に対して複雑な思いを持つ子がいるのも確かだが、これから世界へ羽ばたく子どもたちが、自分と違う存在をもっと受け入れてもらえたらと強く感じた。

② 中国社会に触れない子

また、中国を好き、嫌いに関わらず、中国に住んでいながら中国らしいことにほとんど触れていない子が多い現状もあった。蘇州日本人学校の児童生徒の大部分は、日本人向けのマンションに住み、1日の大半を学校かマンションの敷地内で過ごす。子どもだけで敷地外に出ることは禁じられているので、現地の人と出会う機会は大変少ない。

家族で出かけることももちろんあるだろうが、日本人学校の近くには、通称「商業街」と呼ばれる日本人街があり、外食をするにも日本式の飲食店ですませることが多いそうである。買い物も、現地系のスーパーよりは日系のスーパーが好まれるため、子どもが現地の商品を目にすることはあまり多くない。

自分が住む地域は、社会・世界への入口である。中国に住んでいながら中国の社会・文化に触れない子たちは、将来世界で活躍しようとするとき、異文化を受け入れたり、社会を実感したりできなくなってしまわないだろうか。これは、グローバル化が求められる日本人学校だからこそ乗り越えなくてはならない課題であると考えた。

(2) 中国の文化

そんな現状の中、保護者の方に話せる機会があれば「中国の社会、文化に触れさせてください」とお伝えしてきた。幸いにも、赴任2年目から、中国の文化に関わる教育活動を担当させていただくことができた。本書では、国際交流委員会と中国文化クラブでの経験を中心に、中国文化に関わる教育活動についてご報告させていただきたい。

2. 中国の文化に関わる教育実践

(1) 蘇州・中国文化体験

① 概要

蘇州日本人学校では、蘇州や中国の文化に触れることや、週1～2回実施している中国語の授業の実践の場を設けることを目的として、年に1回、「蘇州・中国文化体験」（以下、「文化体験」）を行っている。

	H26	H27	H28
小1	切り絵	切り絵	切り絵
小2	昆劇鑑賞	武術体操	武術体操
小3	中国結	中国結	中国結
小4	昆劇鑑賞	昆劇鑑賞	中国結
小5	五歩拳	五歩拳	五歩拳
小6	昆劇鑑賞	昆劇鑑賞	中国茶芸
中1	水墨画	中国結	工場見学
中2	水墨画	工場見学	水墨画
中3	書道	書道	書道

表①蘇州・中国文化体験の内容一覧

「文化体験」では、蘇州や中国の文化の中から、学年の発達段階に応じた内容を選び、講師の先生方をお招きしたり、施設を訪問したりして、実際にその文化を体験する（実際に実施した体験内容については、前頁表①を参照）。中国に住んでいながら、きっかけがないと自分から触れる機会が意外と少ない子どもたちにとって、本物の文化に直に触れることのできる貴重な場となっている。また、「文化体験」は、例年、学校公開週間に行っており、参観する保護者の中には子どもの製作活動を手伝ったり、一緒に体験に参加したりする方もいる。

②国際交流委員長として

赴任2年目に、「文化体験」を担当する部署「国際交流委員会」の委員長として業務に当たらせていただいた。すでに軌道に乗っていた「文化体験」ではあったが、人の入れ替わりが多い学校事情、日本とは異なる中国社会の、それこそ「文化の違い」等の条件により、新たな授業内容を発掘する必要がある。本書では、いくつかの文化体験の内容とそのネタ探しの様子をご報告したい。

③文化体験その1「五歩拳」

「五歩拳」とは、中国の武術の基本的な動きを含めた5つの型を連続で行う武術である。赴任1年目と3年目の2回、5年生の担任として授業に参加させていただいた。例年、講師の先生をお招きし、中国語の先生に通訳していただくので、担任としては補佐的なことしかできなかったが、たった2時間で児童は五歩拳をマスターし、大満足の文化体験だった。授業の最後に、中国武術を使った護身術もご指導いただいた。

④文化体験その2「中国結び」

中国結びとは、よく赤いひもを編んで作られるお守りのような飾りに代表される、中国の伝統工芸である。大人でも難しいような結い方もたくさんあるが、小学生が取り組んでも1～2時間程度で仕上がるような簡単な結い方も多くあるため、小学生の文化体験の教材としてはもってこいである。赴任2年目に3年生の担任として授業に参加させていただいたが、講師の先生をお招きし、書画カメラなどを使ってご指導いただいた。3年生は3学級あったため、各学級2時間続きで時間を設定、そのうち1時間目に講師の先生に教わり、もう1時間でひたすら編むという形式で行った。3年生にはやや難しい内容ではあったが、学校公開週間で、保護者の方が多く来て下さったので、ほとんどの子が時間内に作品を完成させていた。

⑤文化体験その3「シルク工場見学」

国際交流委員長として文化体験の内容を増やすため、アイデアとしては以前から日本人学校にあった「シルク工場見学」を復活させることとなった。実際には、シルク工場だけでなく、実際に刺繍を製作している「刺繍研究所」とセットで見学する内容を考え、中学部や中国語の先生方に実践していただいた。

幸い、シルク工場自体は職員研修で訪れていたため、再度下見に行った際に、拙い中国語を駆使して資料と連絡先をいただくことができた。また、絹の関連で、個人的に観光で訪問したことのある「刺繍研究所」にも見学に行ければと思い立ち、学年の先生と共に下見に行き、採用を決めた。「刺繍研究所」は、蘇州の名物である刺繍を製作している様子だけでなく、1つ何百万～何千万円もするような高級な刺繍の作品を間近で見られる施設である。その後の連絡調整等は、さすがに中国語の先生を通して行っていたが、産業革命～租界時代を支えた産業と伝統文化の関連をセットで体験できるこの企画の実現は、「文化体験」の理念に一定の貢献ができたのではないかと思う。

⑥文化体験その4「中国茶芸」

H28年度、諸事情により昆劇鑑賞の実施が難しくなることが分かっていたので、代わりに企画したのが、小学部6年生向けの「中国茶芸」である。中国では、生活の中にお茶を飲むことが、日本よりも深く根付いている。伝統的な作法や入れ方についても、日本人に人気の習い事であると共に、観光地やお茶の名産地では、見かけることがあり、「文化体験」のラインナップに加えておきたい内容だと考えた。

中国のお茶の作法は、日本のそれとは全く異なり、例えば湯飲みが小さい、湯飲みを洗ったお湯をお盆

に捨てるなど、子どもにとっても印象的であろう特長がある。小学部のクラブ活動である「中国文化クラブ」では、すでに中国茶体験の実績があった。しかし、クラブ活動での実践は、中国茶を味わうことを中心としていたため、家庭科の学習でお茶の入れ方を学習した学年なら、中国茶の入れ方を教わると面白いのではと思い、企画を考えた。

アイデア自体は比較的容易に受け入れていただいたが、問題が1つあった。それは、中国茶の茶道具が日本人学校にないということだった。講師の先生にお願いして用意していただくことも考えたが、中国にある日本人学校に、中国茶の道具が揃っていないのは残念なことだという思いもあったため、各方面に働きかけることにした。

授業で使うとなれば、茶道具のセットが最低6セットは欲しい。まずは蘇州、上海のお茶市場で道具の価格を調べ、H28年10月、学校に予算申請をした。実際に購入する際も、実物を見て決めたかったので、通販や業者を通すことは避け、品数豊富な上海の市場で茶器セット（蓋碗、茶杯、茶海、茶漏）、茶盤、茶托、茶挾、茶杯入れを購入した。その後、講師の先生に見ていただき、足りなかった賞茶荷を購入した。上海までバスで赴き、3名で6セットの茶道具を運ぶのは大変だったが、購入金額は合計1050元（当時17000円程度）で抑えられたし、自身としても市場で茶道具を買うなどという貴重な経験をさせていただき、とても印象に残っている。

⑦今後の課題

鑑賞学年の重複を避けるためにH28年度は実施を見送った昆劇鑑賞だったが、税制度の変更、観賞場所の制限等の条件から、実施を続けることは難しいかもしれないという状況で、私は赴任を終えた。昆劇鑑賞ができなくなるとしたら残念なことである。代わりに、世界遺産に登録されている蘇州の庭園で写生会をしてはどうかと代替案を伝えはしたが、今後も、新たな文化体験のネタの発掘は、継続的に担当者が行っていかなければならないと考える。

(2) 中国文化クラブ

①概要

蘇州日本人学校小学部のクラブ活動に、「中国文化クラブ」がある。その名の通り、中国の文化を体験するクラブである。例年、現地での生活が長い先生や中国語が堪能な先生が担当し、1年を通して二胡の演奏を学んだり、中国人の講師や大学生をお招きして、中国の文化を教わったりしているのだが、どういうわけか、赴任3年目、私にポストが回ってきた。

中国語も片言しか話せず、中国文化も対して詳しくない私は、それでもなんとか入ってきた子どもたちをがっかりさせないようにと思い、前任の先生の実践を土台として、次のような活動を行った。



中国結び製作の様子

②実践その1「中国結び」

前任の先生の実践を引き継ぎ、講師の先生をお招きしてご指導いただいた。「文化体験」では3年生で中国結びを行うので、講師の先生には違う結び方を、とお願いした。講師の先生は、中国の方が日本語が堪能なため、とても助かった。45分の授業時間はやや短かったが、クラブは4年生以上であるので、できなかった分は持って帰って作らせた。

③実践その2「切り絵」

切り絵は、中国の観光地でのお土産の定番である。切り絵自体は多くの国にあると思うが、技術の高さと生活への定着度では中国が1番であろう。クラブの授業としては、単に「切り絵」をするのでは、中国らしさが出ないので、中国だからこそできるということ、中国の文化から学んだということの実感が得られるように配慮した。型紙を中国の現地で購入した本をコピーして使ったのだが、中国の切り絵の本も今ではグローバル化して中国らしくないデザインも多い。従って、実際に指導する際には、入口はできるだ

け中国らしい型紙を用意し、そこから発展させるようにした。また、現地で伝統的な切り絵用のはさみを購入して使用させた。

④実践その3「はんこ作り」

中国の判子（はんこ）と言えば、「篆刻」が有名である。しかし、篆刻は小学生にはやや難しい。また、蘇州日本人学校では、中学部の美術のカリキュラムにも組み込まれている。そのため、前任の先生は、5cm角のゴム印用のゴムを用意し、通常の彫刻刀で判子を作らせていた。私もそれにならってゴム印を使ったのだが、単に判子を作るのでは篆刻との関連が薄いと考え、判子は氏名印、字体は中国古来の字体に限定することとした。

インターネット上には、現在使われている漢字を中国古来の字体に直してくれるサイトがある。それを利用し、休み時間に子どもたちに字体を選ばせ、全員の氏名を旧字体で、一辺5cmの正方形の大きさで下絵を作ってあげた。クラブの授業時間の作業は、下絵を写すところから三角刀で線彫りするところまで、ほとんどの子が45分で完成できていた。字体や画数にもよるが、たいていの子なら、彫刻刀初体験でも、60分あれば終わられる内容で、クラブ活動にはちょうどよい内容だった。

⑤実践その4「中国茶」

これも、前任の先生が考えて下さった内容を踏襲した。講師（中国結びと同じ先生）をお招きし、中国の様々な種類のお茶（緑茶、紅茶、青茶（烏龍茶など）、白茶、黒茶、黄茶）を味わうことを中心に、淹れ方などもご披露していただいた。日本茶と比べ、種類による味の違いがはっきりしているため、小学生でも好みを区別することが容易なため、教材としてとても優れていると感じた。

⑥実践その3「中国象棋（将棋）」

中国の象棋は、日本の将棋とはルールが全く違うので、駒の動かし方を短時間で覚えさせるのは無理である。そこで、学校備品であるiPadに中国象棋のアプリをダウンロードした。アプリなら、間違った駒の動かし方ができないので、日本の将棋ができない子どもでもすぐに楽しむことができた。

3. 終わりに

「国際交流委員会」と「中国文化クラブ」での経験を通し、児童生徒に異文化を体験させる大切さを改めて感じた。それとともに、今さらではあるが、中国という国の大きさを実感した。実践の中で、ネタ探しには苦労も伴ったが、中国という大きな国の、非常に多様な文化のおかげで、結果的にはその時々で最良の選択ができたと思う。中国の文化は、その歴史の長さと同様性のため、講師の先生が多くいらっしゃり、文献も多く出ていること、文化が市民の生活に根付いていること等の理由から、教材としても大変優秀であると感じた。今後、中国の学校に赴任する方がいらっしゃったら、ご自分で中国の文化を体験し、是非とも教育活動に取り入れていただきたい。そして、将来世界で活躍する子どもたちが、異文化をスマートに受け入れられる素地を養っていただきたいと思います。